

全自者協ニュース

・全自者協ニュース/第4号/1993年(平成5年)10月
 ・発行所=全国自閉症者施設連絡協議会・事務局 ☎0593-94-1595
 ・発行人=石丸晃子 ・編集人=川相智史

平成5年度



全国自閉症者施設連絡協議会の第5回総会が去る5月11日(火)午後6時から、東京・虎の門パストラルで開催された。

定数確認の後、議長にうさか寮・中田勉氏を選出、議事が進められた。

提出議案は、平成4年度事業報告、平成4年度決算報告、平成5年度事業計画案、平成5年度予算計画案、および平成5・6年度役員選出の5議案で、それぞれについて審議が行われた。

平成4年度事業報告、決算報告については事務局による内容説明に引き続き、監査報告が行われ、議案どおりに承認された。

引き続き、平成5年度事業計画案、予算案も原案通り可決された。

平成5年度事業計画(概略)

行政諸機関及び諸団体との情報交換、陳情活動は既定の事業の中

心になっているが、引き続き厚生省、日本自閉症協会、発達障害連絡協議会などと情報交換、陳情活動を継続する。第7回大会は、「自閉症者と心の自立をめぐる」の大会テーマのもとに、平成5年11月18、19日に志摩学園を主管施設に福岡・リコホテル博多にて開催される。第8回大会は、石山センター、厚田はまなす園、星が丘寮の3施設合同で企画が進められており、北海道で開催される予定。施設会員名簿、及び会報を例年通り発行する。施設実態調査に関しては、研究的要素を加味するともに継続する。

役員の改選は、任期満了にともなうもので次のように選出された。

- 会長 一石丸晃子
- 会長施設 一あさけ学園
- 副会長施設 一袖ヶ浦ひかりの学園
- 一すみ学園
- うさか寮
- 第二ともえ学園
- 監事施設 一川崎くさぶえの家
- 南材ホーム
- 事務局 一あさけ学園

以上の通り、議案の審議、承認がされた後、問題提起があり、次のような討議がなされた。

施設の週末帰宅が社会的に話題になってきているが、全自者協としての見解はあるかという提起に対し、帰宅に関しては、家庭との協力が必要である。介護能力に欠ける家庭に職員の労働条件を理由に無理やり帰すということはあってはならない。週末帰宅は、利用者にとって必要だということが社会、家庭において認められていないのなら、認識を改め、理解を求めていく努力をしなければならぬ。その際、家庭の同意を得て行っているかどうかが重要だ。この件に関しては、全自者協内でも討議を深めていかなければならない。大会の分科会テーマなどでも取り上げていきたい。

また、全自者協が管理している各施設のデータ、情報については、どの程度まで情報公開をはかってよいものか、現在、規定等はないが、今後運営委員会を中心に検討していく。

その他、新加盟施設の紹介等が行われ、閉会した。

石丸会長、石井副会長に聞く 自閉症をめぐる最近の動向

今国会に提出されることになっている「障害者基本法」など、自閉症をめぐる最近の動向について、石丸晃子会長と石井哲夫副会長にお話をうかがいました。

—まず、障害者基本法をめぐる動きがあると思いますが。

石丸—先の国会で廃案になり、改めて今国会に提出されることになっている「障害者基本法案」において、障害の定義が、身体障害、精神薄弱、精神障害の三つの列記になっており、自閉症が障害の定義の対象として明記されていないことにたいして、不安を感じていました。同様の危惧を持つ、日本自閉症協会、日本てんかん協会、希少難病者全国連合会が、「心身障害者対策基本法の対象拡大運動」を行うことになり、全自者協も自閉症協会と協同歩調をとることにいたしました。時間のゆとりがなく、会長の判断で行いましたが、法案の原案の訂正は困難ながら、付帯決議で、自閉症が対象に含まれる事が明確になることは期待が持てる状況です。短期間に、総決起大会、陳情活動と慌ただしい運動でしたが、自閉症福祉が一歩前進することになれば、関係者一同

にとって、大変励みになることと思えます。

—社会福祉全般の政策動向はいかがですか。

石井—今、福祉改革の波が押し寄せているとき、地方分権化、民活、在宅福祉と施設福祉の協同、ということが強調され、特に、地域福祉サービスを強化していく事になるが、その際、福祉人材の増強が大きな課題である。社会福祉施設に關係する人が60万人といわれる現在、現状の措置制度をそのままに、その福祉戦略としての在宅支援戦力を拡大強化していくことになる。当然、安い労働力が求められ、ボランティアの活用とか、一般市民の社会福祉援助への支援を求める方向に動いている。その際、援助の方向性や、援助していく人の福祉の問題が生じてくる。専門化の拠点や専門化の方法を考えていかなければならない。

—障害福祉に問題をしばるといかがですか。

石井—人材整備に際して量的拡大を計るとともに、質的向上のための方法論を考えざるを得ない。社会福祉においては、社会福祉の知識と技能、態度というか、価値観、人生観が当然問題になってくるわけだが、人材の養成と地域社会のネットワーク作りという点で、やはり日本では社会福祉施設の活用が考えられるわけである。現在、老人福祉と保育とに目が向けられて、障害児者施設が取り残されている。施設の専門性の確立という課題に対して、社会福祉政策の戦略的拠点が行政官庁であるため、その行政の枠の中で包括、構想できない問題が障害福祉の中に多いこと、また、公的な責任体制が対人援助という社会福祉の主要な仕事の核心になかなか結び付かないことが問題で、やはり民間の力を多く採用しなければならぬ状況にあると思われる。発達障害とか精神障害に関する福祉がどうしても立ち遅れてしまうのは、社会福祉援助における、本質的な難しさを示している。そういう観点から、障害児者施設の福祉援助というものを常に踏まえて、社会福祉サー

ビスとしての援助を考えていく必要がある。その点が、現在非常に不足している。福祉計画を立てる場合、構造的な体系だけでなく、機能的な内容について検討する必要がある、それができるのが、唯一、社会福祉施設ではないか。援助の実践の積み重ねと、その評価こそ必要である。

—その中で全自者協加盟の施設に求められるものは。

石井—全自者協に関していえば、発達障害の中でも、困難で、社会参加の必要があっても、なかなか社会が受け入れてくれなかったり、家庭療育が不十分で在宅援助も困難な、自閉症に対して、施設の中で、試行錯誤的に行っている実践なり、理論化が進められている。そのことを、広い社会福祉のサービスの根幹にすえていくという認識が必要になってくる。それが、全自者協に加盟している施設の施設長及び、職員が、どれだけ自覚しているかが問われている。真の福祉改革の担い手としての位置にあるのが我々ではないかと思っている。

実態調査中間報告



全自者協は自閉症成人施設の抱える療育・運営上の諸問題について行政サイドへの陳情を行ってきたが、その際に、各機関を説得するための実態データを整理・検討する必要性が叫ばれ、平成二年度より調査委員会を発足させ、自閉症者施設実態調査を継続実施している。この度、平成四年度調査の中間報告がだされた。

○平成四年度自閉症者施設実態調査の内容

今回の調査は、前回の大規模調査(平成二年度)時に比べて会員施設が大幅に増加した理由(10から27施設)により、実施時期をやや早めたものである。

(a) 施設票について

調査項目を大きく分けると、運営面と処遇面の二つから成っている。このうち運営面に関しては、複雑で幅広い自閉性障害に対応できる職員の確保や配置をどうしていったらいいのかに重点を置いていく。この目的を図式化すると、図1のようなになる。

(b) 個人票について

自閉症とそれ以外の精神遅滞に生ずるさまざまな行動障害について、その内容や程度の違いを浮き彫りにし、自閉症者施設における処遇の困難性や彼らに対する個別の処遇の必要性を明確化していくことが基本的な課題と考えられる。

○調査の対象および実施方法

平成四年十月一日現在、本協会加入の自閉症者施設27施設と入所者(定員)一〇四二名、およびバックアップをしている福祉ホームとグループホーム6ヶ所を対象にしている。なお調査票は、施設票が各施設に一部、個人票を入所者個々に一部ずつ配布する。

各施設の施設種別、入所定員数、入所者総数に比した自閉症児数、性別や年齢分布、知的水準(IQ)の分布などに関しては、平成三年度の施設実態とほぼ同様の結果が認められた。特徴的な知見を概観すると、下記のようなことが言える。

(1) 施設の多くが保護者を中心にして設立を進めてきた。

(2) 入所者30〜50名の比較的小規模な施設が多い。

(3) 自閉症障害を反映してか、圧倒的に男性の入所者が多く、年

齢も18歳〜20歳代の比較的若い世代に集中している。

(4) 入所者の四分の三以上の者が、測定不能を含む重度な精神遅滞を合併している。

○調査結果のまとめ(概略)

現時点での調査結果を、自閉性障害を持つ入所者八二九名についていくつかまとめてみる。

a. 入所者個々の将来への見通しについて

現在、社会参加を進めている者の内訳は、職場実習中45名、就労中・その他が23名みられるものの、社会参加を進めていない者が全体の93・8%と大多数を占めている。また将来への見通しについても、条件が整備されたり、短期間の訓練指導によって地域社会が可能な者が13・4%いる反面、約6割の者が地域社会に向けて目算の立てられない状況にあることがわかった。かなり多数の者が施設内での作業あるいは療育プログラムの段階にあると思われる。

b. 各行動障害の出現頻度について

表1の結果は平成二年度調査と近似し、さほど変化はみとめられなかった。これより、次のような

見解が再度確認された。

①自閉症成人にしばしば見られる行動障害には、自傷、固執、常同行為、攻撃性爆発、精神運動興奮などがある。

②出現頻度パターンにより、頻繁に起こりやすいもの(固執、常同行為)と、時々、まれに起こるもの(自傷、攻撃性爆発、精神運動興奮)とに大別できる。

③多動は加齢に伴って減少する傾向をもつ。

c. 各行動障害の出現と社会生活活能力との関連性

図2のとおり、社会生活年齢(SA)と十の相互関係を有する行動障害項目がほとんどであるが、摂食障害や攻撃性爆発は関連が乏しいようである。さらに行動障害の種類によっては、それぞれ社会生活年齢(SA)3・5・9歳が基本点となる項目に分けられることや、SAが9歳以上の比較的高機能と思われる自閉症者にあっても、固執、精神運動興奮、攻撃性爆発の行動障害は約半数以上の者に残存し、彼らの社会的適応のむずかしいことを示唆した結果を得ている。

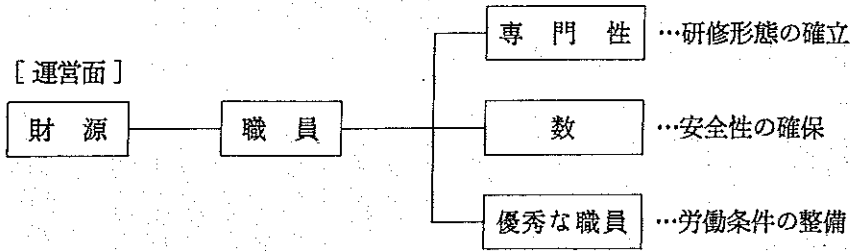


図1 運営面に関する調査の図式(目的)

表1 各行動障害の出現頻度(%)

行動障害	頻	繁	時	々	ま	れ	以前あった	な	い
自傷	86	10.4	207	25.0	147	17.7	43	5.2	346名 41.7%
固執	330	39.8	177	21.4	112	13.5	35	4.2	175 21.1
常同行為	193	23.3	148	17.9	117	14.1	39	4.7	332 40.0
攻撃性の爆発	40	4.8	235	28.3	208	25.1	74	8.9	272 32.9
精神運動興奮	106	12.8	337	40.7	194	23.4	30	3.6	162 19.5
多動	89	10.7	113	13.6	75	9.0	115	13.9	437 52.8
摂食障害	42	5.1	34	4.1	18	2.2	-	-	734 88.6
睡眠障害	33	4.0	59	7.1	32	3.9	-	-	705 85.0
排泄障害	27	3.3	32	3.9	11	1.3	-	-	759 91.5

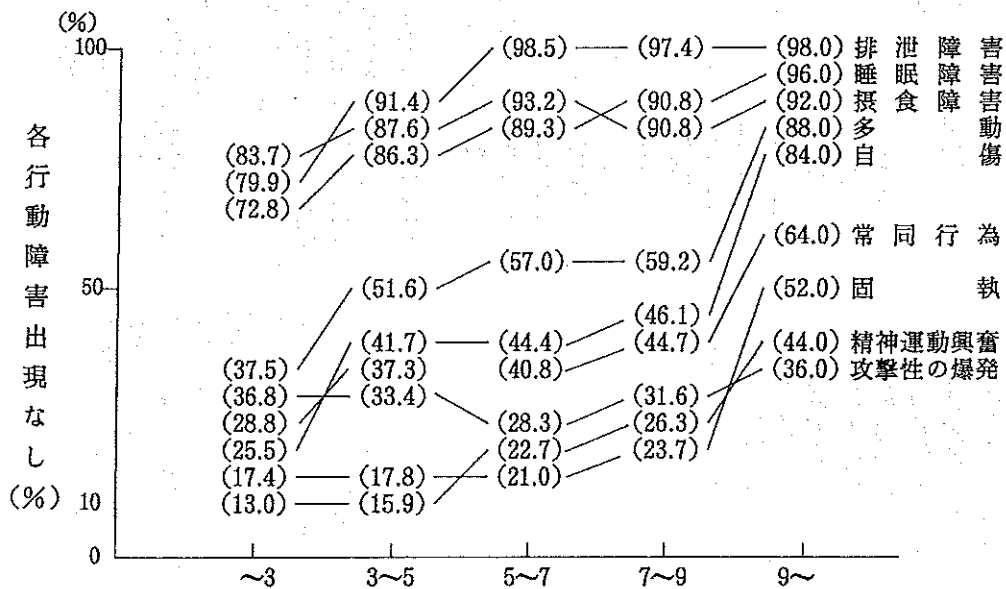


図2 各行動障害の出現なし(%) 全検査SAレベルとの関連性

特集

今日から明日へ

加盟施設の近況

星が丘寮

「星が丘寮開設五周年」

○記念事業

星が丘寮は、今年の十一月で満五歳になります。この五周年を記念して、二泊三日（十一月十二、十四日）の沖繩旅行を企画致しました。この旅行を成功させるために、北海道という観光地だらけの立地条件を生かし、毎年少人数で一泊二日の旅行を実施し、社会資源の利用の仕方をおぼと同時に旅行の楽しさを体験してきました。

この実績を元に、なぜか理由ははっきりしないのですが、本州を通り越して、一気に沖繩に行くことではないかということになってしまいました。我が星が丘寮が企画した旅行だけに目を見張るばかりの豪華な内容（特に食事と宿泊場所）となりました。父母会で親御さんたちに参加を呼び掛けたとこ

ろ、旅行の内容の豪華さに軽いどよめきが起こり、定員三十名の施設なのに八十五名の大旅行団となってしまいました。

説明に来ていた旅行社の社員はこの様子を見て思わず顔をほころばせてしまい、反響のすごさに気を良くし、『食事についてはさらに豪華に全員が楽しんでいただけるとものに致します』、と約束をしてしまったのです。皆がにこにこ顔になったところで終わればよかったのですが、彼は参加者の反応にさらに気を良くし、『この時期北海道は雪が降るかも知れませんが、沖繩は昼間は半袖で快適です』、と言ってしまったばかりに、お母さんたちの、『自分は何を着ていけばより格好良く楽しい旅行ができるのか？』、という女子職員も巻き込まざるを得ないにつ終わるとも知れない白熱した議論の応酬の場となってしまいました。その上、彼はこの状況に圧倒されてしまったのか熱に浮かされたように、『マンガースとハブの決闘を見ましょう』とか、『土産物を買うにはここが良いです』とか何とか言うものだから、父母会はもうごった煮の状態になってしまいました。

ということ、親子、兄弟、職員総出でこの旅行を大いに楽しむということになり、五周年の記念行事はこの『ごった煮沖繩旅行』に収斂されてしまいました。

○ハウスの建設

星が丘寮に入所されている方のお母さんが亡くなられたため、その遺産をいただけることになりました。その使い道については、お父さんとも相談し、町の中に一軒家を建てることにしました。

星が丘寮を利用している人たちは、定員三十名中自閉症の人たちが二十八名で、しかも知的に重くててんかんを合併している人たちも多いため、今の制度でのグループホームの利用ということになると、かなり困難な状況です。そこで、このハウス（名前がまだ決まっていないので便宜的にハウスと言っている）を、地域で仲間と一緒に暮らし、様々な体験ができる場とすることを目的として建設することにしました。

半年以上かけて土地を探し、やっと良い土地が見つかり、九月中旬あたりから着工致します。出来上がるのは二ヵ月後です。

現在検討している利用の仕方は

土・日曜日、祭日、夏・冬の長期休暇に、このハウスを利用し生活体験の場を広げていくようにします。利用者によっては、ここから近くの通所施設に作業実習を行うということも考えています。どちらにしても、生活を豊かにするための場として、大いに利用していくことになっております。

皆様も何か良いアイデアがありましたら、星が丘寮にご連絡ください。また、北海道に來られる機会がありましたら、ぜひこのハウスにお寄りください。

（寺尾 孝士）

三気の里

「三気の里の近況」

定員五十名から三十名増の八十八名定員に向けて増築工事が八月十五日より始まりました。日本船舶振興会の援助事業です。平成六年三月には完成予定です。

収容施設は日々の暮らし、日々の療育を伴います。日々の暮らしでは工事現場で現在いる園生の生活があります。五十名から八十名に増えることによる食事、入浴等の日常生活の準備があります。療育では現在の五十名の園生に絞る

せが来ないよう、より大切にして、三十名を受け入れなければなりません。大変ですけど楽しい準備です。

(土井 尚典)

すだちの家

「こんにちは」

すだちの家は、平成四年五月、福井市東大味町に開所しました。福井平野の東部に位置し、美味しい米として有名なコシヒカリの産地でもあり、緑豊かな自然環境の良い地域です。福井県では最初の自閉症療育の専門的な施設です。で、自閉症者を持つ父兄の期待も大きなものがありました。現在二十七名(うち女子三名)の入所者がおりますが、平均年齢は十九才と学卒者が多く、施設の雰囲気も活気があります。

施設の基本理念は「やさしく」「わかりやすく」「ていねいに」援助者に対応することです。青年期は彼らにとっては危機の時代だともいわれています。

すだちの家では、彼らの様々な症状をまず「受容」し、相互交流を深める中から心地よい依存関係を築き上げていこうとしています。

療育の成果は予想以上で、すでに作業活動にも取り組み始めています。石焼き芋の店頭販売、焼かない編む陶芸、わさびの栽培等ユニークで夢のある作業の今後の成果に期待しています。入所者一人一人に合った療育プログラムを作っていくことが今後の大きな課題です。

(酒井 与志夫)

みずほ学園

「みずほ学園の近況」

開設以来三年半が経過して、学園の自閉症者達の行動もずいぶん安定してきました。キャンプ、一泊旅行、海水浴、村祭りのみこし担ぎ、地域と共に行う運動会、ゴルフ場近辺の環境美化活動、駅伝大会への参加など、三年前なら考えられない事が立派にできるようになりました。作業でも、花の生産は年間一万鉢を越えますし、紙すきも技術がかなり向上し、均質な、販売に耐える製品ができるようになりました。食事の支度、片付けは全部自分達でやっていますし、今では洗濯や仕分け、運びも自分達でやっています。

結局、自閉症という障害を持つ

ていても、大部分のケースはやりようできちんと育てられる、という事だと思えます。

みずほ学園が大事にしてきた事は、自閉症でも単純精薄でも彼等は私達と同じ人であり、人としての特殊性、プライドを誰もが必要としており、だからそれを持てるように励ましていこう、という事でした。

これは職員にもあてはまるでしょう。職員が頑張って園生を育てていけるためには、職員が十分なプライドを持っていなければなりません。集団組織ですから職員はかなり管理される面もありますが、職員はその中でしっかりと自分のプライドとできるものを掴み取っていく必要があります。園生の育ちは、こうした職員の育ちに裏打ちされていたものだと思えます。しかし、こうしたやり方が成果を上げにくい人も六〇七ケースはあります。そこにはいわゆる強度行動障害に該当する人、知的障害は軽度だが情緒や行動の自己統制ができにくい人、性衝動の発現が尋常でない人、精神分裂病と判断されている人などが含まれます。学園ではこうした人達の処遇にも全力をあげますが、怪我を防ぐ

ため女子職員をはずさねばならなかったり、一対一で男子職員を配置したり、徹夜で見張りしたりという困難な状態に置かれる事になりました。

学園として安易な投棄療育に走る愚は犯したくないので、職員の総力をあげて頑張っていますが、このところ職員の疲弊がかなり激しいので、これが他の園生の処遇に影響を与えないよう注意をしているところです。

(森本 照雄)

日置川みどり園

「施設の社会化を目指して」

施設を利用する入所者の生活の内容やその質は、利用する施設の範囲にとどまらず、施設が存在している地域社会との関係で問題にされ、評価されるものであることは、すでに十分に理解されているところである。しかし、現実の入所者の社会生活は、必ずしも豊かに充実したものであると、評価する事ができない状況が見られる。

この社会生活の貧しさは、施設を利用して入所者が社会に参加する場が制限されているとともに、特にその人間関係の貧弱さに

起因していることが、しばしば指摘されている。社会生活を拡大していく場が、施設との関連でどのように考えられるのか、その場に参加して、どうすれば豊かな人間関係を維持する事ができるのかを具体的に組み組んでいる事例を報告する。

施設の社会化の基本になるのは通常の生活を営ませる事であるから、生活リズムをどう整え、処遇をいかに高めていくのかとつながってくる。生活する場所は施設の中だが仕事をする場所は外にしようという事で、できるだけ外へ出ていくことを中心にしている。当園の位置する所は田舎であり、そんなに外に仕事があるわけではないが、基本においては、自然と共にいくということである。人と人が生きる事を「共に生きる」と一般に考えがちだが、私たちは自然と共に生きることを抜きにしては人間としての生き方はないんだということをも一つの基本と押さえている。

従って、自然と共にある生活の仕方を追及していきたいと考えている。自然が一杯である。その中で、どう自然と共に生きるのかということを基本にする。農耕、養

鶏、陶芸等の作業に励んでいる。

養鶏は、約三〇〇羽を平地飼いでおり、産んだ卵をできるだけ安い値段で地域の人たちに購入していただいている。また、近くの大きな川の堤防があるが、その草刈りである。慣れぬ手つきで鎌を使ってともかく手でやり始めた。これは奉仕をするという考え方である。地域の一員であるから、その中で役立つ仕事をしたい。良い卵を安く売るといいうのもそうである。施設というのは他人から与えられる存在ではない。奉仕をされる存在であること自体おかしいのである。援助はすでにいただいている。

(下田 忠義)

川崎くさぶえの家

『川崎市くさぶえの家』の近況

川崎市は東西に伸びた細長い街で、その中心を走るJR南部線沿いには富士通、東芝、NEC、ゼネラルなどの大手電気メーカーの工場があり、周辺には協力工場と称される下請け孫受けの工場が多くある。このところの不況の影響はこの業界にも如実に現れており内職やパートの求人情報が激減し

時給も下がっている。

くさぶえの家の作業も多くは電気関係の作業であるが、不況の影響を受けて失った作業については作業種の開拓を積極的に行っているため量的な問題はない。またメインのボルコン作業は好調で、今年春には日給を六百円から八百円に上げることができた。昨年度は一人あたり約三十三万円を支払っており、園生が自分の稼いだお金で欲しいものを買う経験を繰り返すことで、作業意欲も増し、生活の範囲も拡大してきている。

平成三年より、園生が職員とともにY通信に出社して作業をしている。しかしこのY通信も内職とパートがカットされ、今までくさぶえの家が請け負っていた作業も社員がすることになったため、出社できないことがあり安定しない状況である。

またこの不況により、就労レベルにある養護学校卒業予定者も作業所への入所も余儀なくされており、より重度で既卒者の当園の園生に一般就労は状況として難しくなっている。障害者のクビ切りなど悪い環境の中、当園から就職した園生については社内での評価も高く、今のところ不安はない。

在宅の混乱した自閉症者のため

の自閉症児者短期訓練事業は好評で、市内の養護学校実習との日程調整に苦慮している。他傷、登校拒否などの問題行動の解決にとりあえずは成功しているものの、訓練終了しばらくしてから問題行動が復活することが多い。このことについては、家庭との連絡を尚一層密にしていかなければならないと考えている。

自閉症者の自立のための当施設も、定員いっぱいとなり前述のような社会環境のもとで卒業者を送り出すことが難しくなっている。

そんな中で養護学校の卒業予定者で当園のサービスを希望する者が多くあり、この人達のニーズに答えきれないのが現在の悩みである。

(丸山 尚)

塚脇学園

「塚脇学園の歩み」

環境は鹿児島湾を望み桜島が夕映えに浮かぶ標高四百メートルの森と緑の高原で、春は小鳥がさえずり、夏は涼しく秋はススキの穂の揺れる自然を満喫できる杉木立ちの中にあります。平成五年四月清水基金からマイクロボスの補助

を受け各種行事等に利用し行動範囲も広がり快適な生活が約束されました。

八月九日は至る所で大災害が起こり多くの人命、道路決壊、交通遮断等と電気、水道等が止まり特に飲料水には困りました。

十月は県のわくわく運動会、各地区の友愛運動会等で友情と信頼を深めました。見聞を広めた沖繩旅行は紺碧の海、新しいものと古いものが同居し、さらに戦争を知らない園生たちは深い感銘と反省を示しました。

夏は地区民や親の人と花火大会焼肉大会で楽しく過ごしました。地域の道路の災害復旧工事や海水浴場の流木、ちり等の清掃に汗を流し充実した一日を過ごすことができました。

今後の計画は園芸、陶芸の実技研修会、老人クラブとのゲートボール大会、養護学校を中心とした研修会、郷土芸能、昔の遊びや道具等の製作講習会の計画があります。

毎月一回、徒歩やマイクロボスの一日遠足、秋は収穫祭(展示即売会)忘年会「テーパーマナー(ホテル)」、学習発表会等も楽しみに一つです。

鹿児島市に県下各施設の花壇の出展がありますが、今年は大雨や台風で苦労しています。花は園生の心を慰め夢の世界へ誘い二度と通らぬ今日というこの道を悔いのないよう努力させ、園生の未知の可能性を信じ自主自立の精神で根気強く歩き続けております。

(福永 政次)

泰山寮

「秋にはいって」

今年の夏は、天候不順で暑さを知らないまま過ぎてしまった。

「雨、雨、雨。ドライブの多い休暇となりました。」

「雨のため湿気も多く、イライラもつる。合間を見ては散歩に連れ出しました。」

「海もだめ、山もだめ。雨のため外へ出れないことがわかったのでしょうか、妙におとなしく過ごすことができました。」

(夏季帰宅実習帳より抜粋)

秋に入り、愛知愛護主催「ふれあい大運動会」の出場に向け、その意識づくりが始まった。日頃は自由に走り回ったり、飛び跳ねているものの、指定された場所ので、指定された事を行うとなると苦手

なものです。これも訓練の一つ。当日。トラックを走る。バトンタッチもできた。アンカーがゴールのテープを切った。かに見えたその瞬間、立ち止まってしまった。

テープが「行き止まり」に思えたのか? フォークダンスは、大勢の中で全くの他人と手をつないだ。動きはぎこちないが、一緒に行動している。普通の光景に映った。

また恒例の「親子バスハイク」も企画中。今回は、「親子で作って食べようカレーライス」が合い言葉となっている。

これら行事のねらいの一つに、「変化への対応」が挙げられている。施設では、日課が組まれていて、寮生の安定を図る上からも大切な事だが、一方では、ここでの生活パターンが形成され、他での適応が困難となる要素をも含めている。このため、意図的に作業時間を変更して外へ出たり、場所を変えたりして、日課崩しを試みている。また現在取り組んでいる

「ダンボール仕切り組み立て」の作業が七種類程あって、これが業者の都合で日替わりで届いたり、週間で変わったりすることもない機会となっている。これらが、寮生の目にどう映り、内・外面にど

う表れてくるか等、その状況と経過をよく観察し、不適応の軽減の一助としていきたい。

紅葉も間近。寮生達は今、サイクリングや喫茶店ツアーのシーズンに入り、何かと浮かれています。今日もまた、グラウンドからは、自転車乗りの特訓で明るい? 笑い声が聞こえてきます。

(峯山 豊)

初雁の家

「快活に尽きる」

初雁の家では、寮生、職員共に日々力を合わせ励んでおりますがこの夏、棟の一部を改築し、寮生の自立に向けて新たな一歩を踏みました。新しい「キッチン」と「ダイニング」。週末の未婚宅者は、そこで一般家庭に近い形で生活をします。自分たちで配膳から後片付けまで行い、和気あいあいとした雰囲気です。この快活さが得られるには様々な努力がありました。安全性、使い易さ、丈夫さももちろんインテリアの美しさも忘れず考慮し、図面は何度も書き直されました。また、寮生も、穏やかさを保ち、職員と寮生、寮生同志が協力し、せつせと動く姿があ

ります。カウンターから渡されたお味噌汁の味は、また格別である事でしょう。

さらには、行事も目白押しで、八月には「第二回納涼祭」を計画しましたが、生憎の台風で寮内で行う事となり残念でしたが、それでも皆、太鼓、バンド演奏のリズムに合わせ体を動かし、楽しむ事ができました。そして、スポーツの秋は体力作りも忘れません。川越市が主催する「ウォークソン大会」「スポーツ大会」にも参加する予定です。毎年恒例となっている、一月には「成人式」。皆、おしゃれに装い、施設全体で成人される寮生を祝います。余興もまた見物です。二月になると、一泊での「スキー合宿」があります。レール別に班をつくり、笑いと汗と涙流れる大イベントです。どの行事も、寮生誰もが、楽しみにしている事と思います。

小さな出来事でも、寮生にとって、良き思い出、喜びとなるよう益々、豊かな初雁の家を目指し、平成五年度後半を充実させていければと思います。

(草野 玉枝)

あいの家

「あいの家」近況」

平成六年四月に、木工、織物の作業棟の建設を予定しており、現在準備を進めている。建設予定地の樹木の伐採は昨年終了し、今年伐採した木を利用し、父親ヘルパー等の機会に憩いの場としてのキャンプ場、アスレチック場を整備している。現在テニール、カメラ等の設備を完成させたところである。

行事については例年通りであるが、夏の海水浴は、冷夏と高波のため中止し、国立日立海浜公園へのバス旅行に変更した。また生活班ごとの旅行(父兄参加)も四回目で、目的地や内容で悩むようになったが、二泊の範囲で、これまで以上に楽しく、参加できるようプログラムを求めてクラス毎に企画し、尾瀬方面、房総方面、鬼怒川方面に出掛け、一クラスを残し、実施し終えた。八月の納涼大会は三百名以上の参加があり、大いに盛り上がったが、場所の面からも、労力の面からも限界である。三月末までの行事については、恒例のクリスマス会、四十キロ強歩大会、愛護主催の合同キャンプ

等が中心であるが、十月の第二回ゆうあいピック熊本大会にフライングディスクで、一名参加する。

今年度の体制面では、長期休暇を除いた全ての月で、三泊か四泊かの短期帰省を実施しているが、引き続き、住人にとってより良い帰省の在り方を探ってゆきたい。

(岡本 亨)

伊自良苑

「しゃくなげ寮、二度目の秋」

伊自良苑が自閉症者専門療育部門「しゃくなげ寮」を開設して、はや二度目の秋を迎えました。まだまだ軌道に乗った状態とはいえませんが、幸い今まで大きな事故もなく、何とか落ち着いていた日々を過ごせるようになりました。

今年度は、入所者の生活自立・社会自立に向けての新たな事業として、生活ホームの建築、園芸ハウスの設置、専属の職員が付き添って地域の事業所へ仕事に出掛ける苑外作業班の新設と、入所者の個々のニーズにより適切に配慮されるような取り組みを行っています。また、岐阜県が今年度から三カ年継続事業として、障害者と地域住民を主体とするボランティア

が一体となって、花木の生産を行い地域の美化運動に参加すると共に、障害者への支援活動の輪が広がることにより福祉ボランティア活動の助長を計る事を目的とした「転作田ふれあい福祉農園事業」にも参加し、現在、用地の整備が進行中で十一月には花木苗の植栽が予定されており、苑生と地域住民との新たなふれあい交流が始まるうとしています。

行事に目を向けると、七月十三日には伊自良苑夏祭りを行いました。例年は八月の第一日曜日に七夕祭りとして地域の皆さんと一緒に楽しむ催しですが、今回は伊自良苑国際交流事業の一環として来村したパリのサンルイ少年合唱団歓迎夏祭りとして日程を早めて行いました。会場も例年の苑のグラウンドから村のふれあいドーム(屋根付き催事場)へ場所を移し、より多くの地域の方々の参加が頂けました。またサンルイ少年合唱団の方々も、夜店、ゆかた、盆踊、花火と日本の夏を心ゆくまで楽しんで頂けたようです。今後、十一月には村民運動会、ドリームスポーツ大会(岐阜県精神薄弱者体育祭)への参加や、浜名湖方面への親子二泊旅行の計画もあり、十分

にスポーツをして行楽の秋を満喫できそうです。

まだまだ試行錯誤の毎日が続きますが、一日でも早く県下の自閉症療育の拠点としての役割が果たせるよう、また、先輩諸施設と肩を並べられる様な療育機関となるよう、今後ますます努力していきたいと思えます。

(戸松 伸)

めぶき園

「午後の生産活動」

めぶき園は創立三年を迎え、各生産活動や個々の生活により一層の創意工夫を行い、活発かつ躍動的な施設作りを目標としている。

今年度新たに、半年前に寄贈していただいた陶芸窯を活用した陶芸グループをはじめ、それに並行して、空き缶つぶしや葉書作りを行うリサイクルグループを設立。

両グループ共に午後のみの活動であるが、利用者のニーズに応じた活動を始めて、日々充実した生活を送ってもらおうと励む毎日である。

その他従来からの活動も、度々改善や工夫が加えられ、利用者・職員共にスムーズに活動に取り組

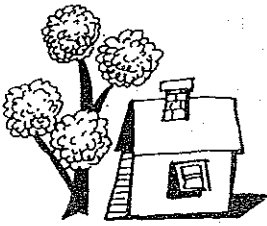
めるようになってきた。

毎週一回、午後の活動時間を利用し利用者レクリエーションを行っているが、より充実を図るため全員一緒でのレクリエーションから、各生産活動グループの少人数でのレクリエーションとし、楽しく新鮮な雰囲気味わうことができるようになった。

今年度より年に一度、各生産活動グループでの一泊旅行が実施されたが、それを含め利用者レクリエーションは、生産活動の取り組みを意欲的にし、また園での生活にめりはりをつけられる利点があると思う。

めぶき園はまだまだ改善していかなければならない問題点もある。多施設との交流を深め、良い所学ぶべき所を吸収し、最良の施設づくりを目指していきたいと思う。

(菅 里絵)



はぎの郷

「テンヤワンヤ」

二年ほど前、保護者が職員かの誰かが「一度、みんな元気な間に海外旅行をしてみるか」と言った。その場は「そうだ/そうだ」と一同軽く受け流した。

が、しばらくして、どこでどう弾みがついたか、その限りなく冗談に近い話しが一気に燃え上がってしまった、全員で本当にグアム島旅行に行くことになった。

「さあ、貯金だ」「私はいつでも即金で払えるワ」……まあ、各家庭の事情はよく分かりませんが、それぞれの事情に合わせて金銭のやりくりが始まった。

そして今、準備の真つ最中。その忙しい事。担当職員はパスポート取得の為、夜も各家庭回りなどで、生活のリズムはむちゃくちゃ。「こんなにパスポート取得に苦労するとは思わなんだ」というグチに心から同情する次第。

仲間・保護者・職員・在宅の仲間・医師など総勢百十余名は十一月二十日から四日間、石川県小松空港からチャーター便で海外への旅に出る。保護者のほとんども海外旅行は初めての経験。昔、そん

な余裕なかったもんな。

楽しい旅になれば、今後の酒の席での話題に事欠かないに違いない。万が一、飛行機にトラブルがあれば、はぎの郷構成成員は四年六か月の思い出と共に全て消滅する。こんなキャンセルも時にはおもしろい。

(中島 章雄)

南材ホーム

「ホーム便り 93」

今年度は通所生を新しく五名迎えて、現在男性二十名、女性一名の計二十一名が在籍(定員二十名)また仙台市単独事業として重度重複障害者等加算(行動障害)の実施で指導員三名増員の計六名となりました。

春先、受注業者一社が県外移転となり、この作業の占める割合も大きかったことから替わりの作業を探すまでがおおわらわとなりました。幸いに代替えの作業を紹介してもらえらることになり、また他の受注業者分の作業拡大もでき一件落着となったわけですが、下請け賃金が定期的に得られるものの業者の都合が最優先となる現状を

痛感しました。新作業は慶事用の造花づくりですが、カラフルな色合いが興味を集めこの作業へも順調に移行し、すっかり定着したようです。

自主作業として取り組んでいる「アルミ缶リサイクル作業」は町内の缶回収箱に寄せられた缶を回収しスチール缶との選別後、つぶして業者に渡す作業ですが、地域の理解を得て、昨年よりもさらに回収量が増えています。しかし雨続きだった今夏、外作業であるこの作業に取り組めない日が多く、昨年は缶不足に悩みましたが、逆に今年は山積みされた未選別の缶の山をただ恨めしげに見つめています。

今年より新たな行事として『父親参観』を設けました。土曜日の午前中半日の作業の参観、午後は懇談会を行いました。多数の参加があり家庭での様子と比べながら熱心に参観していました。我が子の姿にふれる機会またホームの指導の理解につながるよう、療育協力体制づくりのいい契機になればと思います。年内に残り半日の参観を日曜日に計画中です。

それぞれが各作業種・行事でハッとするほど生き生きとした活躍

を見せてくれます。いろいろな場面を経験しそれを自信につなげていってほしいと願っています。つぎは誰がどんな分野で力を発揮してくれるか楽しみです。

(松浦 喜美枝)

あさけ学園

「あさけ学園の中・長期計画」

あさけ学園では、これからの中長期計画の一環として、現在、施設整備にとりかかっています。

具体的には、

- ①開設後十二年目にはいっているA・B棟(居住部分)と厨房などのサービス部分の大規模修繕、
- ②在宅対策としてのショートステイ施設の増築、
- ③強度行動障害特別処遇事業のための施設整備、
- ④その他の法人単独整備などです。

計画の基本的な考え方は、施設を保護的な終身収容の場にならないで、相談、早期訓練、通所、収容ショートステイ、グループホーム、診療所、コーディネートなどを有機的につないで、地域で障害者が生きていく際に必要とされる援助システムの整備を行い、『自閉症児・者のための療育体系』を完

成させることです。

私たちが常に注意しておかなければならないのは、それらのシステムを閉鎖系にしないことです。

閉鎖系として完結してしまえば障害者はその閉鎖システムの段階を一生かけて昇っていただくにすぎなくなります。

私たちが目指しているのは、障害者に我々と同じ人生を想定し、そのライフステージのそれぞれで必要な援助を、地域社会という生活基盤から切り離さないで組み立てていくことです。収容や通所、療育や指導もそのひとつの方策にすぎないわけです。

平成三年度からスタートさせた地域療育拠点施設事業は、そのひとつの例です。コーディネーターが療育機関や福祉事務所の肩代わりをするのではない、むしろ、してはならないわけです。

最終的には地域の諸資源を活性化させ、それぞれがその力量や取組みを高め、お互いが連携できていくことがねらいであり、施設もそれらのネットワークの中のひとつにすぎないわけです。

(奥野 宏二)

東やまた工房

横浜・東やまた工房の近況

「横浜市自閉症児・者親の会」の運動として創られた『東やまた工房』は、常に横浜市内全体の自閉症児者を視点においた事業展開をしなければなりません。開所して四年目ですが、毎年数名足らずの新規募集に対して二十名を越える希望者があり心苦しい思いをしてきました。また、工房は横浜の北端ともいえる位置にあり、南部方面の人たちのニーズに答えられない現実もありました。そこで今年から二つの地域作業所を創設しバックアップを始めました。バックアップというのは、横浜では法人が直営する作業所は認められておらず、やむをえず運営委員会を創設しそこに職員を派遣する形態をとりました。

作業所の一つは「地域センター港南ジュート」で横浜南部の拠点と位置づけました。もう一つは、『S・E・センター樽町』で、これはサポーター・エンプロイメント(援助就労)の略称をつけて、地域に近い仕事の場として位置づけています。作業所の開設にあたっては、十四名の「やまた工房」

の利用者が作業所に移っています。これをわれわれはとても大事で、あり難いことと考えています。将来は施設に措置されると安心で、地域作業所に通っている人はいつか施設に思っている。この溝をうめないと施設の枠を越えた地域で自閉症者を考えることができなかったのです。

平成八年開所予定の入所施設が開所する前に、地域での生活の選択肢のひとつとしてグループホームの開設・運営を急ぐ必要があります。グループホームと入所施設の関係も先程と同様に、地域で暮らすために必要な社会資源だというのが私たちの考え方です。その考えに保護者や親の会も理解と共感を示してくださって、グループホーム作りの動きも活発化しています。

従来の施設を中心とした限られた援助体系を越えて地域の中でデイとナイトの活動を保証する包括的な援助体系をつくり出す必要があります。しかしそれは法人が単独で作れるものではなく、当事者保護者や親の会も含めた切実な地域生活への希求の中から生まれるものだと考えています。

(関水 実)

第二ともえ学園

「学園の昨日今日明日」

昭和六十一年四月に定員三十名で開園してから八年目を迎えています。

当初から日常生活、作業、レクリエーションに対する取り組みを二本柱として日々の生活を活力のあるものにしており、

日々の生活の中で、作業が中心となってきたり、それだけ基本的な日常生活に対する取り組みがおろそかになりつつあり、それを見直し、何ができるか整理しているところだ。

昨年度の途中から実施している、自立した生活を目指しての前段階の試みを生活訓練として行っています。

独立した生活に必要な身の回り品、道具類を少しずつ用意し、それを使って生活しながら、作業(仕事)時間とそれ以外の時間の使い方を身に付けていくことをねらいとしています。これは、他の人との兼ね合いもあり、試行錯誤しながら行っています。

次に作業は、当初から取り組んでいる椎茸栽培と、食用油の廃油を原料とする石鹸製造そして中途

から始めた内職作業を中心に行っています。

秋から冬にかけては椎茸の最盛期にあたり、収穫、販売、そして原木の確保等に追われます。

今考えていることは、作業種目を増やし、個々におった仕事内容を提供することです。そして、例えば、藤工芸品、牛乳パックの再製紙づくり、木工製品、農作物の栽培等で学園の「ブランド商品」を創りだし、それに伴って、作業の少人数化を図りたいと思っています。

こうした生活、作業と共に重要なところに位置付けられるものとして、レクリエーションというものがあります。

特に力を入れているものに、小グループ(五〜八名)による宿泊旅行があり、年間六回計画しています。また、学園祭、地域の催し物への参加、買い物、外食等のお楽しみも沢山計画しています。

趣味も楽しみの一つと考え、職員の得意な事を媒体として、取り入れて欲しいと思っています。

(古栗 慎)



うさか寮

「十年の節目」

うさか寮が開園してから十年。

この十年間に、居住空間の拡大や福祉ホーム・グループホームの開設など、地域での生活を創る方向付けがなされ、中軽度の人たちのニーズに対応する施設整備を進めて着実に成果を上げている。

しかし、一方において重度の自閉性障害の人たちや重度・重複障害の人たちの生活では、必ずしもそのニーズを満たしているとは言えない。ややもすれば集団が画一化されたり、常識の規制によって生活の枠組みが強められたりなど個人の生活が軽視されがちである。また嗜み付き、突き飛ばし、破壊すぎましい自傷など、常に不安と警戒心を持って接して行かなければならない人たちが生活しているのも事実である。

十年たった今、この現状を踏まえ、今後の施設の新たな方向付けを考える時期にきている。嗜み付きや突き飛ばしなどの問題行動も内的要因・環境要因・指導内容など細かく点検し努力はしているものの現在の施設機能だけでは、その対処に限界がある。

彼らの多くは、人生の大部分を施設で生活すると予測される。彼らの問題行動を心の叫びとして受け止め、彼らのニーズに合った快適な生活を保護する施設づくりを私たちは考えなければならぬのではなからうか。

今、うさか寮では、その新たな方向付けを模索中である。

(荻行 慎一)

京北やまぐにの郷

「京北やまぐにの郷の近況」

京北やまぐにの郷が開所して四年が経過しました。開所以来利用者処遇の在り方について思考錯誤の連続でした。特に朝、夜の生活時間帯、余暇時間帯は勤務体制の關係で職員も少なく、飛び出しや他傷行為等、問題行動を抱えた利用者に対する対応に手が取られ、生活や余暇に対する個別的な援助が不十分な状況があり、そのことの改善が大きな課題としてありました。今年度、茨城県あいの家の療育体制を参考にさせて頂き、生活・作業グループを五グループに分け、担当職員を固定することにより利用者一人に対して継続した個別的援助の充実を図りました。

新しい療育体制になってまだ六ヶ月しか経過していませんが、食事、着脱衣、歯磨き・洗面、排泄等の基本的な生活習慣についての把握と個別的援助が可能となり、夜の過ごし方の時間についても少しずつ個別的対応ができるようになりました。食事も生活グループ単位(十名)でするようになり、非常に落ち着いて食事ができるようにになりました。まだまだ課題は多いですが、これからも利用者を中心に据えた援助を進めていきたいと思っております。

(松上 利男)

志摩学園

「よりきめ細かい療育を」

目指して」

本年度は、全国自閉症児・者施設連絡協議会全国大会の幹事施設を引き受けたことを契機とし、既存施設内外の環境の整備を図り、よりきめ細かい療育を目指して療育体制の見直しを行いました。施設はあくまでも療育を実践する現場であるから、部門に拘らず全職員が年度ごとの目標・方針に従って積極的に総ての療育に参画するという立場に立った療育体制づくりを行い、従来の事務部門(庶務・

医務・厨房)と療育部門(学習・生活・作業)を事務部門「療育I」指導部門を「療育II」としました。また「療育II」は「生活指導」「作業指導」「学習指導」の三部指導会から「生活指導」「企画・研究指導」「余暇指導」「健康指導」の五指導部に改められました。作業指導では、農作業班・軽作業班・作業学習班に加え、従来、農作業班の雨天時における作業として試行的に行なっていた廃油石鹸づくりが軌道に乗り園内販売から外部委託販売に販売網が拡大され、また新しい作業を開拓するという目的を持って石鹸作業班を設けました。

生活指導では、(一)自立に必要な身辺自立生活指導と(二)生活グループ別活動(園生五十名、指導員十八名を三つのグループで目標及び活動内容を決めて活動するグループ)では、学園以外の社会生活を多く体験させて社会性を養うために外出回数を増やしました。余暇指導では、特に本年度からは、家庭との連携や地域との交流を深めることを目的として、余暇指導の企画充実を図っていききたいと思っております。

健康指導では、(一)全体運動

(二)肥満運動(三)スポーツ行事への参加を三本柱とし、特に本年度からは、地域のスポーツイベントに積極的に参加し、地域交流を深めていきたいと思っております。

企画・研究指導では、療育研究分野での中核的役割を担い、特に本年度からは、県下の自閉症児・者の療育センター的役割を担うという自覚のもとに、自閉症セミナーの開催を検討しています。

また、学園の過去の療育の実践を集めて冊子にまとめ「療育概要書」を作成しております。

(内田 博昭)

ひらきの里

「地域と共に、コスモス祭り」

開所3年目を迎え、地域に根差した祭りをやろうということになりました。

昨年、始めてコスモス祭りと銘打って行った所、地域を中心に七百名の参加があり盛大さに当方びっくり。

今年は皆で楽しむ祭りにしようとして子供にはミニSL、人形劇、おみこしコンテスト、中学生にはロックコンサート、主婦には地元は無農薬野菜、つきたてのおもちな

どのバザー、とにかく職員、ボランティア、後援会も汗だくで取り組むことにしました。

施設で祭りをやる場合、どうしても年間の発表に捕らわれがちになってしまいますが、ひらきの里では地域の方と施設がより密接になる年間の始まりになるような祭りにしたいと思います。

園生も職員も楽しめるものであればきっと地域の方に喜ばれるものになるでしょう。

今日も、おみこしコンテストに参加する近所の小学生達が製作に訪れています。

(内山 徹)

石山センター

「自閉症福祉施設

処遇研究会発足」

ここ数年の間に、多くの施設において自閉症の入所率が高まっていることは、御承知の通りと思う。

その入所率を背景とし、自閉症に対する専門的知識、技術等がその様な状況下にある施設において緊急の課題とされている。入所対象を主に自閉症とする石山センター、厚田はまなす園の合同による研修会が年一回(これまで四回)行われていることは、昨年度も記

載した。しかし、前述したような状況にある幾つかの施設の二施設合同の研修会参加の要求もあり、自閉症福祉施設処遇研究会と名称を代え、今年度六月より活動を始めることとなった。

会の目的としては、自閉症者の処遇向上のための研究・専門施設としての機能向上をめざすこととし、その為に運営委員会と研究委員会が設置されている。研究委員会は、各施設より選出された者で構成され、定期的に研究会を開くなかで調査、処遇・指導プログラムに関する研究、研究会企画、他機関との連絡・提携、研究誌作成等を行うものである。既に七月に参加五施設を対象とした実態調査が行われている。また、十月十二日に北海道おしまコロニー、星が丘寮施設長 寺尾孝士氏を招き、第一回実態調査より基調報告をし、その後、寺尾氏による『自閉症を処遇するにあたって』と題する講演、続いて二施設による事例発表それについての討論会が行われる。今後この研究会がその目的のもと発展的に活動をし、自閉症者処遇、職員自身の資質の向上に寄与するものと思われる。

(箭内 宏行)

しもふさ学園

「五年を経て」

しもふさ学園が、保護者の力によって開設されてから早五年を経た。思い返せば、この地を提供される方があり計画が急速に進むかと思われたが、地域の受け入れに難色があり、足踏みの時期もあった。しかし、あれから五年、地道な地域への取り組みによって理解が得られ、町の納涼祭、体育祭、文化祭などに声をかけていただけ

るようになり、町の一員として参加している。また今年の学園の夏祭りには、町長さんを始め地域の方々が、多数おいでいただいている。中でも、老人会の方々が演奏してくれた大正琴の調べは、懐かしさと、この地域のいいようなない温かさを感じさせるものがあった。

さて、園運営の方であるが、試行錯誤の五年であったが、指導体系も固まり安定した処遇ができてきている。生活面では、基本的身辺処理の指導、援助の他、クラブ活動、理容や身近かな外出等が実施されている。また、作業においても、リサイクル班、椎茸班、飼育栽培班、統括班の四班体制が定

着化を見ている。

今年度の事業の目玉は特にないが、より一層の処遇向上をはかる為、職員研修に力を入れている。

研修会、見学等の派遣はもとより、数施設における職員宿泊研修を実施しているところである。来年度からは、遅ればせながら緊急一時保護事業を開始したいと計画している。

地域にねぎしながら、施設機能の強化を急いでいる今日である。

(小林 勉)

袖ヶ浦ひかりの学園

「強度行動障害特別処遇事業

の開始」

かねてより建設中であった強度行動障害特別処遇棟が完成し、八月より事業が開始しました。

「こだわり・自傷・他傷・奇声・粗暴な行動・排泄の障害」などの著しい行動障害のために本人も苦しみ、同時に家庭や地域において生活していくことが困難な人達四名が入所してきました。三年という期間の中で行動障害の改善をはかることとされていますが、袖ヶ浦のびる学園との連携のもとに給力をあげて取り組んでいます。また、長年の希望であったプー

ルの建設も始まりました。これまた園外の施設を利用して何かと不便をかこっていました。この完成によって年間を通じたプール指導が可能になり、ひかりの・のびろ両学園の利用者に対する新しい処遇プログラムが展開できるものと期待しています。

(中塚 博勝)

いすみ学園

「十年目の結晶」

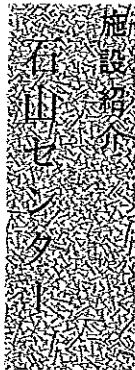
今年はいすみ学園が創立して十年目を迎えます。設立当初は入所者たちが、いすみでの生活に溶け込みやすくということを目指し、「楽しくいこう」をモットーにのんびりムードでスタートしました。その後作業活動にも徐々に熱が増し、平成元年頃より働きやすい作業体制作りを注いだ次第です。

現在進行中の課題は、働く事に関して多少格好がついてきたと思えます。ただ生活習慣全般を見直した時、必要な援助が不足していることに気がつきます。働く事と同等に余暇、生活指導面にも構成化された援助を毎日の取り組みとして考えなければいけないと思

います。労働、余暇、生活指導の整理にしばらくの間、我々の取り組みの主眼が置かれることでしょう。

昨年秋、いすみにもグループホーム(さくらの家)が町内に建てられ、定員五名(自閉男子一名、女子一名)で地域生活の中で頑張っています。町内、あるいは近隣の町で、長く勤めていたこともあり、彼らが町内の人達と交わす挨拶ひとつを見掛けても、我々の力ではどうも担えない部分の啓蒙を自然にクリヤーしてくれていると、つくづく感じます。また、今春には、いすみの敷地内に地域交流ホームが完成しました。多目的ホールとして大いに活用して

(堂下 勉)



古川 誠

石山センターは、昭和五十九年十一月に札幌市南区に開園した都市型施設です。施設建設当初は地区町内会を中心に地域住民から施設反対の運動もありましたが、社

会全体の自閉症に対する理解も進み、町内会運動会、地域文化祭、雪像づくり等の行事にも楽しく参加できる状況になっています。

その石山センターも八年が過ぎ建物入り口にはラベンダーや芝ざくら、園庭には父母の方から寄贈された花々が見られ、入所者の手入れによって春には花が咲き、秋になると咲いてと、明日への息吹を感じさせてくれています。

現在の施設規模は、入所者総数が三十名(男性十八名、女性十二名)、職員は施設長をはじめ直接処遇職員が十三名、その他事務調



理関係を加え二十名で構成されています。入所者の年齢構成は十七歳から六十歳までと幅がありますが大半が二十歳代、三十歳代前半に集中しており、所謂青年期の障害者による集団構成がなされています。現況の自閉症者は二十名で、自閉・重度者の割合も八十%を越えています。

石山センターは、成人障害者の豊かな生活保障の実現を目指し、利用者一人ひとりに社会人としての豊かな自立生活を営めるように援助目標を掲げ、さまざまな実践が展開されています。そしてその目的の実現をすすめていくにあたっては、まず集団生活をベースとしながら、大きく作業部門と生活部門の二つの分野で取り組がなされています。

- 作業部門については、入所者が働くということによって生活に目標が持て、それによって知識技能を獲得し、主体的に社会にかかわるといふ基本方針のうえに、
- ① 自主生産作業―木工、手工芸
 - ② 日常生活にかかわる作業―園芸
 - ③ 直接社会にかかわる作業―紙工、スプリン入れ、プラスチック提げ手詰め

の各作業が準備されています。集

団の中で共に支えあい、自らの持つ能力を最大限に発揮しながらものをつくりだしていくことは、人間の成長・発達にかけがえのない重要な意味を持っていると考えます。紙工・スプーン入れ・プラスチック掲げ手詰め等の直接社会にかかわる作業において自信を深め、また木工・手工芸で製作された裁縫箱、トレイ、ティッシュケース、エプロン、ハンガーカバー、キンチャク等の作品は札幌駅北口のライラックパセオにおいて販売され、入所者の作業意欲、仕事への責任感を取り立てています。更には実習に出掛け、その能力に応じた就労によって社会の一員としての喜びを得ている人もいます。活動のもう一つの大きな柱である生活部門については、ここでも入所者一人ひとりが主体的に自分自身を生き、日々豊かに過ごすという基本方針のうえに、

①生活範囲を広げる活動

②健康に関する活動

③情操を豊かにする活動

がそれぞれに具体的な内容をともなう展開されています。生活範囲を広げる活動では、社会的な広がりを持っていくためにできるだけ閉鎖的にすることなく、個々の

入所者に応じて積極的に外に出掛ける機会を設け、開かれた施設を考えます。その一つの機会として、週末の買物会や随時入所者の計画によって実施されている園外活動があります。そこには成人施設の一つの在り方として社会的関係経験の豊富さ、そういうものの蓄積の中から個々人を発達させていく成人施設における発達とは見方によつては社会的人間への成長という考え方があります。健康に関する活動では、昨年より成人病予防対策の一環としてウォーキングを主体とした健康増進グループが活動しています。メンバー全員が札幌市健康づくりセンターにおいて形態測定、体力測定、心肺機能測定を受け、そこで行われている「健康づくりのための運動と運動処方」を参考に取り組み、成果をあげています。情操を豊かにする活動ではクラブ活動を組み入れ、絵画、カラオケ、生活(おやつ作り)、運動A・B・Cを準備し、それぞれ利用者自身がプランニングし参加を楽しみにしています。障害を持つ入所者が豊かな生活を、多くの選択肢の中から自己決定ができる、そんな生活の条件整備と、入所者自身が振り返った時

に「今年もよかったね。」とそんな話題に花を咲かせるような幸福を感じる時間をつくってほしい、との思いを抱いています。



■インフォメーション

九州・山口地区自閉症研究協議会
第19回福岡大会

日時—平成6年2月12日～13日
会場—福岡県教育会館
福岡市東区馬出4丁目12

122

主催—九州・山口地区自閉症研究協議会

内容—基調講演・教育講座・分科会・研究発表

連絡—昭和学園内 高原
(0940) 5214687

第10回自閉症児治療教育実践講座

日時—平成6年2月11日～12日
会場—袖ヶ浦のびる学園
袖ヶ浦市下新田1680

主催—社会福祉法人嬉泉
内容—「自我機能を高める」(仮題)

連絡—袖ヶ浦のびる学園内 川相
(0438) 6219121